様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４３０５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１０３３

研究課題名（和文）保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の開発

研究課題名（英文）Developing practical teaching materials for training nursery teachers in the fields of molding

研究代表者
矢野　真（YANO, MAKOTO）

京都女子大学・発達教育学部・准教授

研究者番号：００３６９４７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：保育者養成における「保育者の専門性」、そしてその専門性を育てるために必要なことは何かということについて、保育現場や地域、造形作家との連携を通して造形領域における知識・技能・判断力などを具体的に明らかにし、「保育者の専門性」を育てるために必要な内容の提唱と実践を検証した結果、高い「保育者の専門性」を達成するためには、造形に関する専門的な知識やスキルの獲得はもちろん、それらを通して「コミュニケーション能力を育成すること」が重要であり、保育現場において必要とされるコミュニケーション能力を育成する具体的な内容の提唱による造形理解と実践的教材の開発・検討が必要であることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research aims to further professionalize “the specialty of nursery teachers” through training in cooperation with a university offering a nursery teachers’ training course, a childcare location, the local area, and a writer for the model. To concretely clarify the knowledge, skill, and judgment nursery teachers require, we create a domain model for nursery teachers. To elevate their specialty, we need to perform an analysis of childcare theory and practice with regard to content.
Analysis revealed that to attain professionalization of the nursery teacher’s specialty, “raising communications skills” is important for acquisition of specialized knowledge about modeling and skills for the childcare location. Clearly, models of understanding and practical teaching materials need development. Furthermore, they should be developed through inquiry according to a proposal of concrete content that raises the required communication skills.

研究分野：社会科学

キーワード：実践的教材　造形領域　保育者の専門性　保育者養成　木育　クロス・トレーニング・プログラム　造形を通したコミュニケーション

１．研究開始当初の背景

(1)課題意識をもつに至った総合的背景

近年の保育者養成において、子どもの保育と保護者支援のために保育者に必要とされる知識・技能・判断力など、より高い「保育者の専門性」が語られる。こうしたなかで表現教育のあり方の調査および研究を進める過程で、いくつかの問題点とその改善の必要性が浮かび上がってきた。その問題点の一つとして、造形領域を通した高い「保育者の専門性」を達成することが挙げられ、保育者養成校と保育現場の連携、および地域や専門的な知識や技能をもった造形作家との連携を通して、具体的な造形領域としての実践や教材開発を提示していくことが喫緊の課題である。

(2) これまでの研究成果とその内容

保育者養成において「保育者の専門性」を考えたとき、それぞれの科目において保育現場に役立つ基礎的な学びを基盤に置きつつも、保育の現場において必要とされる総合的な力を養成する造形の内容および教材の検討が考えられていくべきである。こうしたことから、子どもたちのためにどのような経験や学びが必要なのかをもう一度、具体的に捉えなおすことにより、今までの保育における造形領域を理解し、それらを体系的に再構築していく必要があるという、課題意識に至った。

以上の課題意識を持ちながら、平成 19 年～21 年度は、科学研究費補助金基盤研究（C）を受け、「教材開発を通した子どもの創造性を育てる表現教育のあり方に関する研究」をテーマに、教材開発による「造形」と「音楽」を融合した実践を通した研究を行い、保育者養成校と地域の保育現場の連携を通した教材開発と実践こそ今後の課題であるという結論を導きだした。

２．研究の目的

「保育者の専門性」という視座から考えると、子どもの発達を支え、子どもの創造性を育むための環境づくりを行えるような力が一層必要とされてくる。特に、保育者養成校で学生たちが身につけるべき実践力を考えるとき、保育現場や地域との連携、そして造形作家のもつ専門的知識や技能を通して、これら相互のつながりを意識した保育内容の組み立てを見直すことが大切である。

そこで、保育者養成校と保育現場、地域、そして造形作家との連携による、次の目的と内容を含む実践を中心に研究を行った。実際の保育者養成における「保育者の専門性」、そしてその専門性を育てるために必要なことは何かということについて、保育現場や地域、造形作家との連携を通して造形領域における知識・技能・判断力などを具体的に明らかにし、「保育者の専門性」を育てるために必要な内容の提唱と実践を行う。

それら実践を通して、造形における実践的教材の開発を行い、保育者養成校の学生を対象とした講義や演習へのフィードバック、そして現職者の再教育（リカレント）など、広く社会還元することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は、造形領域の具体的な教材研究と試行（計画・実践・評価）を第一の目的とすることから、3 年間（平成 24～26 年度）の研究期間を置き、次のように進める。

①地域の保育所・幼稚園や児童館、造形作家との連携によるワークショップの提案など通して造形領域の現状を調査し、造形領域の現状における問題点の抽出と検討を行う。

②問題点の抽出と検討に基づき、地域の保育現場や造形作家との連携を通したワークショップなどの提案を行いながら、「保育者の専門性」を獲得するための具体的な造形領域の検討と試行を行う。

③これまでの内容を一般公開するための期間と位置づけ、「保育者の専門性」における具体的な造形領域のデータベース作成を行う。

また、参加した 2 年間の学生の学びについての調査を明らかにし、造形領域を通した「保育者の専門性」についての可能性を示すとともに、保育者養成校の学生を対象とした講義や演習へのフィードバックを行う。

４．研究成果

（1）教材開発からの学生や保育者の「学び」

様々な表現領域の実践や教材開発を具体的に検討していくなかで、「木育」を教材とした実践に着目した。「木育」とは、すべての人が木とふれあい、木に学び、木と生きる取り組みであり、人と木や森とのかかわりを主体的に考える豊かな心を育むことを目的としている。生活やあそび、自然環境などと関連付けながら、表現領域の実践や教材開発が行われる必要があることを考えると、「木育」は保育のなかで効果的に活用することができると考えた。

まず、短期的な実践として、平成 24 年 5 月～12 月「児童図工Ⅰ」において「木育」を実践した。受講学生 78 名に対する質問紙調査の分析結果から、次の内容が明らかとなった。

①コミュニケーションを通してテーマやコンセプトを明確にもつことができた。

②木のもつ特性を生かした制作を通して、自然や環境、ものの大切さを学ぶことができた。特に自然や文化など，その背景を知ることにより造形領域から他の領域のつながり

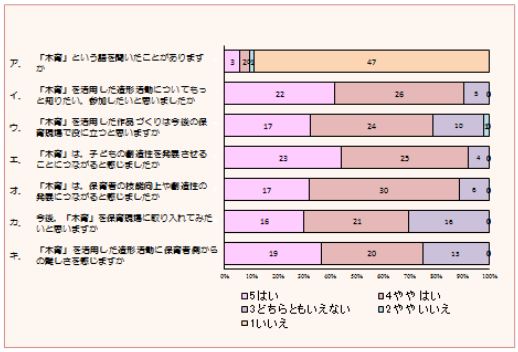
を考えるきっかけとなった。
③材料・用具の正しい使い方などを通して、保育者として工夫する知恵が生まれ、子どもたちと造形に関わる場合に様々な可能性を広げていくことが可能となった。

そこで、平成 23～24 年度の京都女子大学公開講座における「木育」ワークショップなどの長期的な実践として「木育」に参加した学生 17 名への質問紙調査を中心に、作品制作や教材研究に対する取り組みについての聞き取り調査および行動観察を行った。
また、質問紙の自由記述を分析した結果、以下の 4 点に分類された。
A) 知識・理解：実践を通して得た知識に関する記述。〔4 名(23.5%)〕
B) 関心・意欲：実践を通した興味や関心、楽しさを感じたことなど。〔8 名(47.1%)〕
C) 感性・表現：「木育」の実践を通して意識が変わったこと、感性や表現についての気づきなど。〔6 名(35.5%)〕
D) 保育・子どもへの応用：「木育」の実践を通して、保育者の役割や子どもへの活用について考えたこと。〔7 名(41.2%)〕

A) 知識・理解の側面に関しては、「木育」という言葉を知ったこと、形や音といった木の性質についての知識が深まったことを示す記述が見られた。
B) 関心・意欲については、木に対する親しみや興味が増したことを示す記述、木の性質や種類といった具体的な興味に関する記述が見られた。
C) 感性・表現について、日常生活において自然や生活で触れるモノの見方が変わったことを示す記述や、木に触れ、香りを嗅ぐという木に対する感性の高まりといった感性の成長を示す記述が見られた。
D) 保育・子どもへの応用については、保育への活用として、教材のアイデアを得ることが出来たこと、保育における木育の意味を考えたことを示す記述が見られた。
また、ワークショップを通して子どもの視点について考える事が出来たことを窺わせる記述、さらには、実際に保育に導入する際の難しさを感じたことを示す記述も見られた。

以上の結果を総合すると、学生の多くは本研究で取り上げた「木育」の実践的教材を有効なものであると捉えていた。特に、木そのものについての知識を獲得する以上に、木に対する興味、感性や表現についての気づきに関する記述が多く見られており、本実践が素材としての木に対する学生の動機づけを向上させたことが窺える。

また、保育者志望の学生を対象にしていることから、木育の実践を通した感想として、保育教材のアイデアや子どもへの活用など、自分が保育現場でどのように木育を活用するのか、という点について考察がなされていた。
「木育」の実践は、平成 25 年 6 月 29 日開催の第 16 回幼年美術の会・京都研修セミナーにおいても行い、参加した 57 名の保育者に質問紙調査【表】を行ったところ、木育についての意識が啓発され、保育者は保育における効果について肯定的に捉えていた。具体的には、保育者にとって「木育」が実践的教材として、自然や人とのふれあい・関わり方、材料の捉え方、作品を通した感覚の大切さ、表現力の大切さなど、表現領域に関わる実践的教材に有効であることが明らかとなった。



【表】質問項目および回答の分布

（2）教材開発と支援のあり方を通した学生の「学び」

保育者養成におけるクロス・トレーニング・プログラムで行った「型取り制作」(2012)、「モビール制作」（2013)、「地域の材料を使ったペンダントおよび壁面制作」（2014）の実践的教材を通して、学生にとってどのように「学び」の深まりへとつながっているか、その有効性について明らかにすることを目的とした。
クロス・トレーニング・プログラムに参加した学生（2012 年 8 名、2013 年 14 名、2014 年 10 名）の実習記録にみられる活動の記録や考察について、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材としての有効性という観点から分析した結果、学生は造形活動という題材を通して、幼児や高齢者のもつスキルの特性や活動に対する意欲などの心理状況に対しての理解が促された様子がみられ、また幼児と高齢者間の世代間交流の姿についても、造形活動に含まれる共同作業という形態を中心として捉えることができる様子がみられた。

このように本研究での実践的教材は、学生にとって幼児、高齢者および世代間交流の実際について理解するうえで一定の効果を持っており、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材として有効である可能性が

示唆された。

（3）造形ワークショップによる学生の「学び」

平成 25～26 年の 2 年間、教材開発とともに継続的に行った計 17 回の造形ワークショップ(京都K幼稚園 8 回、大阪Y幼稚園 4 回、K女子大イベント 2 回、京都市児童館連盟やんちゃフェスタ、滋賀Z寺、沖縄幼老統合施設）の実践的教材研究から、参加した学生 11 名の学生を対象に、2 年間の実践的な教材研究で学んだことについて、質問紙調査を中心に考察を行った。

質問紙調査は、①実践的な教材研究の点から、②造形ワークショップを行った点から、③コミュニケーションスキルに関する点から、④保育士としての専門性に関する点からについて、それぞれ次の観点から分類した。A）自分自身に対する気付き：ワークショップを通して、自分自身の学びや成長に関する記述、B）保育者としての活動や援助に対する気付き：ワークショップを通して感じた、保育活動としての留意点などへの気付き、C）子どもの姿に対する気付き：ワークショップを通して感じた、子どもの特徴への気付き、D）素材についての気付き：ワークショップを通して感じた、素材の特徴への気付き、である。

記述を分析した結果、①実践的な教材研究に関しては以下の効果が示唆された。

A）自分自身に対する気付き：実践を通して体験的に知識を得ること、目的や子どもへの効果を意図しながら教材研究を行う必要性、実践を通したコミュニケーション能力の向上。

B）保育者としての活動や援助に対する気付き：素材の特性を生かした支援、教材研究や計画的な保育、素材の特性に応じた支援、子どもの特性を配慮した支援、子どもの姿を把握しながら保育を進めることの必要性。

C）子どもの姿に対する気付き：子どもに対する、身近な素材を使用することの効果、年齢や発達差を考慮した素材の提供や支援の必要性目的や子どもへの効果を意図しながら教材研究を行う必要性。

D）素材についての気付き：新しい素材についての学び、またそれが教材研究に繋がることの認識、である。

②造形ワークショップに関しては以下の効果が示唆された。

A）自分自身に対する気付き：協力して活動することの意義、活動の狙いを考える力、臨機応変さの獲得や、活動を楽しむことの必要性。

B）保育者としての活動や援助に対する気付き：子どもの姿をイメージすることの必要性、イメージする力の獲得、環境構成・動線づくり・場面に応じた言葉がけなど、保育の具体的な技術に関する気づきや学び。

C）子どもの姿に対する気付き：子どものもつ想像力の豊かさ、制作における子どもの行動の特徴や個人差、である。

③コミュニケーションスキルに関しては以下の効果が示唆された。

A）自分自身に対する気付き：活動を通したコミュニケーション能力の向上、活動を共有することによる子どもや大人（親）とのコミュニケーションスキルの向上。

B）保育者としての活動や援助に対する気付き：子どもおよび保護者とのコミュニケーション技法についての気付き、子ども同士のコミュニケーションを促す環境構成や援助への気付き、である。

④保育士としての専門性に関しては以下の効果が示唆された。

A）自分自身に対する気付き：ワークショップを通し、保育士としての専門性について考える中で、自身の特性や成長、学びの向上。

B）保育者としての活動や援助に対する気付き：造形活動の特性を踏まえた学びや子どもの視点に立った保育計画、保育士に必要とされる資質に関するもの、保育者同士の連携の重要性。

D）素材についての気付き：素材と実際に触れることで、保育活動に対して応用することへの学び、である。

また、この実践に参加した学生たちの卒業研究作品【図】においても、新しい素材についての学び（教材研究）やコミュニケーションスキルの向上に繋がる作品が多くみられる結果を得ることができた。

【図】自然や人のつながりを主題とした学生作品

（4）まとめ

以上、(1)～(3)の結果から、造形領域において高い「保育者の専門性」を達成するためには、造形に関する専門的な知識やスキルの獲得はもちろん、それらを通して「コミュニ

ケーション能力を育成すること」が重要であり、保育現場において必要とされるコミュニケーション能力を育成する具体的な内容の提唱による造形理解と実践的教材の開発・検討が必要であることが明らかとなった。

今後、保育者養成校で学生たちが身につけるべき実践力を考えるとき、保育現場や地域との連携、そして造形作家のもつ専門的知識や技能と連携することにより、これらコミュニケーションを意識した保育内容の組み立てを見直すことが大切である。つまり、実際の保育現場において応用のきくコミュニケーション能力を育成し、子どもの創造性を育むための「保育者の専門性」を確実なものとする造形教材の検討が重要であると考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 矢野真、田爪宏二、吉津晶子、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の開発－造形活動を通した幼児と高齢者間の世代間交流に対する支援事例から－、京都女子大学発達教育学部紀要、査読無、第 11 号、2015、pp.127－134

② 矢野真、田爪宏二、吉津晶子、保育者養成における地域と世代をつなぐ造形活動－質問紙調査にみられる学生の学び－、大学造形美術教育研究、査読無、第 12 号、2014、pp.35－41

③ 矢野真、田爪宏二、松井勅尚、保育者養成における実践的教材としての「木育」－学生の「学び」の深まりを中心に－、京都女子大学発達教育学部紀要、査読無、第 10 号、2014、pp.113－119

④ 矢野真、田爪宏二、吉津晶子、保育者養成における子どもと高齢者をつなぐ造形活動－保育者を目指す学生の学びを中心に－、世代間交流学会誌、査読有、Vol.3、1 号、2013、pp.67－76

〔学会発表〕（計１０件）

① 矢野真、田爪宏二、吉津晶子、溝邊和成、保育者養成における交流をテーマとした造形活動、日本世代間交流学会第 5 回全国大会、2014.10.4、姫路商工会議所

② 吉津晶子、溝邊和成、田爪宏二、矢野真、養成課程における実習教育の新たな試み－世代間交流を核としてⅡ－、日本保育学会第 67 回大会、2014.5.18、大阪総合保育大学

③ 矢野真、田爪宏二、保育現場における実践的教材としての「木育」、日本保育学会第 67 回大会、2014.5.17、大阪総合保育大学

④ 田爪宏二、吉津晶子、溝邊和成、矢野真、保育者志望学生における世代間交流への支援の特徴－クロス・トレーニング・プログラムの実践から－、日本発達心理学会第 25 回大会、2014.3.22、京都大学

⑤ 矢野真、田爪宏二、吉津晶子、保育者養成における地域と世代をつなぐ造形活動、日本世代間交流学会第 4 回全国大会、2013.10.5、東京都健康長寿医療センター研究所

⑥ 矢野真、松井勅尚、保育者養成における「木育」実践の可能性Ⅱ－学生の「学び」から見る表現領域に関わる実践的教材として－、日本保育学会第 66 回大会、2013.5.12、中村学園大学・中村学園大学短期大学部

⑦ 吉津晶子、田爪宏二、矢野真、養成課程における実習教育の新たな試み－世代間交流を核として－、日本保育学会第 66 回大会、2013.5.11、中村学園大学・中村学園大学短期大学部

⑧ 矢野真、保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の開発－木育の実践を通した学生の学び－、全国保育士養成協議会第 51 回研究大会、2012.9.7、京都文教短期大学・京都文教大学

⑨ 田中文昭、矢野真、保育現場での協働的実践活動を通しての学生の新たな気づきと学び－幼稚園での造形活動を通しての学生の学びのサイクル－、日本保育学会第 65 回大会、2012.5.4、東京家政大学

⑩ 矢野真、松井勅尚、保育者養成における「木育」実践の可能性－ワークショップによる学生の学びを手がかりに－、日本保育学会第 65 回大会、2012.5.4、東京家政大学

〔図書〕（計１件）

①辻泰秀、執筆：浅野秀男、安藤恭子、矢野真、他、萌文書林、幼児造形の研究　保育内容「造形表現」、2014.4、56-59・170-171・246-247

６．研究組織

(1)研究代表者
矢野　真　（YANO MAKOTO）
京都女子大学・発達教育学部・准教授
研究者番号：00369472

(2)研究分担者
田爪　宏二　（TAZUME HIROTSUGU）
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：20310865